

田邊太一はつぶやく。

<ストレス解消>

「幕府に外交のことなし。ただ朝意を奉じ、鎖国攘夷を図って遂げざる跡のみ」。これを言っ
て長年もやもやしていたものが、一気に吹き飛んだ。もう何時でも、阿弥陀如来様の御下に参
上してもよい。阿弥陀さまも「よくやってきた」と頭を撫でてくださるだろう。42歳で惜しま
れて死んだ兄孫次郎に代わって次男の私が田邊家を再興したことを父石庵にほめてもらおう。

田邊太一はつぶやく。

<幕府外交はよくやった>

国内問題があったにも拘わらず、幕府は国益をまもった。樺太はやられたが、北海道、対馬、
沖縄、小笠原諸島を守った。幕府外交がしっかりしていなければ、北海道と対馬はロシアに、
沖縄と小笠原諸島はアメリカに占領されていた筈だ。朝鮮半島はロシアに占領され朝鮮語を話
す民族はロシアの奥地に強制移住させられてロシア語圏になっていただろう。

—●○—

600年振りに成った源頼朝子孫、薩長の復権

田邊太一はつぶやく。

<源頼朝の怨念を薩長が晴らした>

明治の薩長政府は、北条によって鎌倉を乗取られた源頼朝の側近島津と毛利が750年振りに復
権したと見れば面白い。頼朝の庶子、島津忠久は北條政子の嫉妬を受けて、僻地薩摩へ左遷さ
れた。腹心大江広元の子、毛利季光も僻地長州へ。頼朝の墓に、頼朝に寄り添うように忠久、
季光の墓が並んでいるのは実に興味深い。もちろん後の世に島津毛利が建てたものだが。

田邊太一はつぶやく。

<薩長は新貴族を創って自分が貴族になった>

薩長武力革命政府は、歴史的貴族を廃して新たな貴族をつくり、自分が貴族になった。欧州の
プリンス、デューク、カウント、バイカウント、バローンを古代支那大陸の封建時代、周王に
封じられた公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵を当てはめた。自分達が入り込める形にしたと言
わざるを得ない。伊藤博文は公爵、大久保利通も侯爵だ。下級武士から貴族トップだ。

阿弥陀仏の下で田邊太一はつぶやく。

<薩長は自分たちの軍隊のリーダーを貴族にした>

薩長武力革命政府は、自分達が貴族になるだけではなく、自分たちの軍隊のリーダーを貴族に
した。例示すると日清日露戦争で功績を上げた薩摩出身の陸軍大将大迫尚敏・尚道兄弟を子
爵・男爵に列した。軍人は戦争をすれば出世するという枠組みをつくり、戦争が必要とされた。
これが大東亜戦争に突入した真の理由だ。後の世に提唱されたシュンペーターの理論通りだ。

—●○—

頼朝軍事政権の末路

田邊太一は阿弥陀如来様の御許から昭和を嘆いてつぶやく。

<大日本帝国陸海軍>

徳川幕府が江戸に開いた軍事政権を薩長が倒して自分たちの軍事政権を樹立した。大日本帝国
陸海軍は、薩長軍事政権の拠り所だった。この軍事政権が大東亜戦争をまねいた。この敗戦に
よって薩長軍事政権が明治武力革命以来70有余年でやっと崩壊し、民政がやっと実現した。そ
の代償は大きく、幕府が守った北方領土/竹島を実効支配され、沖縄/小笠原すら一時失った。

田邊太一は阿弥陀如来様の御許から昭和を嘆いてつぶやく。

<バルチック艦隊撃滅の勝因>

海軍の大艦巨砲主義は、薩摩の東郷平八郎の老害によるところ大。東郷の初陣は薩英戦争だった。日清日露の海戦を経験して自信過剰だった。日露戦争の勝利は作戦の勝利ではなくて、工学の勝利であることをすっかり忘れていた。B&S社を訪問して「日本海海戦の勝利はあなたたちが製造した距離測定器のおかげ」と演説したのではない。T字戦法で勝ったのではない。

田邊太一は阿弥陀如来様の御許から更につぶやく。

<大艦巨砲主義>

大東亜戦争の緒戦において日本は、航行中の英国戦艦プリンスオブウェールズと重巡レパルスを航空機によって撃沈した。これは画期的成果だった。一方、戦艦大和と同武蔵は、航空機による攻撃を受けて戦わずして撃沈された。敵をとられたのだ。大艦巨砲主義を捨てて空母建造作戦に変更していたら、大東亜戦争は別の形になっていた。いや開戦しなかったかも知れない。

田邊太一は阿弥陀如来様の御許から昭和を更に々々嘆いてつぶやく。

<陸軍の精神主義>

長州の伝統を引き継ぐ陸軍もひどい。オーエスタンレー山脈越えポートトモレスビー攻略、ニューギニア戦線はひどい。その後の補給なしの銃剣突撃によるインパール攻略作戦、これら無謀な作戦は、長州の伝統だ。後先を考えずに倒幕戦争の戦端を開いた長州の伝統そのものだった。1864（元治1）年に攘夷の勅状を真に受けて下関で外国船に砲撃開始した長州そのものだ。

—●○—
明治維新なる名称を使った薩長の詭弁を突く。

田邊太一はつぶやく。

<薩長の倒幕戦争>

松平直克が政治総裁になった時期は、幕末の動乱期だった。1863（文久3）年8月18日の政変→七卿落ち→生野の挙兵→蛤御門の変→第一次長州征伐→第二次長州征伐→伏見鳥羽街道の戦い→東北戦争→函館戦争と繋がる明治武力革命の発端時期に当たっていたのに本人はそれに気がつかず、それを防止できなかった。幕府上層部は何をしていたのか。無能の一言に尽きる。

田邊太一は更につぶやく。

<明治の政治家の本質>

生野の挙兵で思いだした。甥田邊朔郎の岳父、北垣国道は若い頃、郷土“北垣普太郎”と言った。大和（天誅組）の挙兵に呼応して幕府「生野の銀山」を襲撃した。近隣の農民を組織し、福岡藩士平野国臣と組んで長州に落ち延びていた七卿落ちのひとり、沢宣嘉を長州まで迎えに行き生野で擁立し、襲撃したものだ。後の内務次官であるが、これが長州の政治家だ。

—●○—
薩長の天皇私物化への非難

田邊太一はつぶやく。

<薩長による天皇の私的利用>

徳川慶喜が尊皇精神を発揮して国家のために大政奉還した。しかし薩長は自分たちのために尊皇と称して天皇を私物化した。平安時代の藤原氏による天皇私物化にも似ている。天智天皇を助けて大化の改新と称する武力クーデターによって政権をとった藤原氏が、天皇家と深い関わりを形成して、平安時代に天皇家を私物化した。これと明治の薩長政府はよく似ているのだ。

田邊太一は更につぶやく。

<薩長による天皇の私的利用 (2) >

生野の挙兵→蛤御門の戦い→長州戦争 (一次～二次) →伏見鳥羽街道の戦い→東北戦争→函館戦争と続く一連の戦争は、東軍対西軍の戦争であり、戦国時代の再現だった。関が原の戦いにおいては、総大将毛利を頂く西軍が負けたが、この西軍が270年振りに勝利した。勝利の結果、天皇を東京へ拉致し奉って私物化し、自分たちの中央集権国家に利用した。

田邊太一は更につぶやく。

<薩長の天皇制の利用を怒る>

鎌倉時代から続く政治に直接関与しない天皇制は、日本独特の優れた政権交代システムだ。薩長はこれを破壊してしまった。薩長は自分達の権威を守るために天皇を江戸に拉致申し上げたのだ。しかも拉致とは言わず、自らの御意思で東京へおいでになったというシナリオを捏造した。自分達を尊皇開国だったと称し、幕府を蔑皇鎖国であったと言ってすり替えた。

田邊太一は更につぶやく。

<歴史は繰返す>

“関が原”や“大阪冬夏”では、内戦をしている余裕があった。当時の外国ポルトガルとスペインは、日本を武力攻略する力がなかった。と、言うよりも。日本の武力が勝っていたのだ。当時、全世界の鉄砲の1/3がわが国に存在していた。日本刀製造で培った製鉄技術がそれを支えたのだ。遠路はるばる帆船で航海してきて攻撃できるような国ではなかった。内戦できた。

—●○○●●●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○—

大日本帝国陸海軍は、薩長革命軍のDNAを継承。

阿弥陀仏の下で田邊太一はつぶやく。

<日露戦争の勝利は当然>

繰り返す。薩長政府は軍事政権だった。戦争のプロだ。故に西南戦争、日清戦争、日露戦争に勝利できた。戦争は常に訓練している側が強い。最善の訓練は実戦だ。この意味で日露戦争までの勝利は必然性がある。しかしその後の対処が悪かった。アメリカに愛想をつかされ、親日英国までも敵にした。戦争のプロなら勝って兜の緒をしめよ。調子にのってほだめだ。

田邊太一は阿弥陀如来様の御許から昭和を更に嘆いてつぶやく。

<大東亜戦争への突入>

薩長は自分たちの軍隊を天皇直属に据えた。その結果、後の515事件や、226事件を誘発し、挙句の果てに大東亜戦争に突入した。日清日露戦争の勝利は、薩長軍の勝利であったことを認めるが、その勝利が無に帰した。樺太、千島列島、朝鮮半島、台湾を失い、満州にあった南満州鉄道の利権をうしなった。日清日露戦争の勝利が完全に帳消し。徳川時代に戻ってしまった。

田邊太一は阿弥陀如来様の御許から昭和を更に々々嘆いてつぶやく。

<大東亜戦争への突入>

台湾、朝鮮半島、満州の権益、樺太半分、千島列島までがわが国の領土だった。これに第一次大戦で得た太平洋の信託統治権を加えると、地球面積の約10分の1が日本のものだった。モンゴル帝国にも勝る大きさだった。これを薩長軍は、幕府時代の姿にもどってしまった。日清日露戦争の成果は無に帰した。「滅びる」といった“三四郎”に出る広田先生の予言通りだ。



明治武力革命は、ヒエラルキー社会のシャッフル (階層社会の上下入れ替え)

田邊太一はつぶやく。

<家格の低い幕臣の高い教育レベル>

幕府旗本の上層部の武士は、私のように長崎海軍伝習所に入所して外国事情に接することはなかった。だからやれもしない鎖国攘夷を暢(のん)気に唱えた。しかし実務をこなす幕府外国奉行所はよくやった。繰り返すが、北海道を守った。対馬も沖縄も守った。小笠原もまもった。本土が外国の植民地になることを防いだ。これは下部組織がしっかりしていたお蔭だ。

田邊太一はつぶやく。

<下級武士はハングリーだった>

幕末期において下層武士の教育レベルが上層レベルの教育レベルを上回っていた。これは、幕府に限らない。諸藩においても同様だった。現に武力革命を成し遂げた薩長においても同様なことが言える。家格の低い家に生まれた武士たち、特に長男以外は苦しい生活の中でハングリーになっていた為であろう。幕臣旗本次男の私も御他聞に洩れず、ハングリーだった。

田邊太一はつぶやく。

<世の常>

上層階層の中の下部に位置する人がいつも世の中を覆す。教育程度が高くてハングリーだからだ。上部に位置する人は、満ち足りて努力する必要ない。典型的には戦国時代の下克上であり、藤原貴族 (公家) に対する、平氏/源氏 (武家。室町時代の応仁の乱も。明治武力革命も同様である。幕府も各藩も上層部がだめだったが、下層部ががんばった。世の常である。



階層社会の上下シャッフルの常

田邊太一は更につぶやく。

<人材がいなかった>

幕府上層部にも、小笠原、阿部(正外)、松前などの有為の人材がいたのだ。繰り返して惜しむ。阿部正弘が開国と決めてペリーを迎えていたらよかったのだ。阿部正弘が朝廷に対して「どういたしましょうか」と伺いを立てたことが幕府凋落のスタートだった。従来ルールを破ることの意味を認識していなかった。家康以来外様大名に意見を聞くことはなかったのだ。

田邊太一は更につぶやく。

<トップが御殿様ではだめだ>

幕府上層部は、石高5~6万石以上の親藩の藩主が多かった。これを補佐する幕臣の中にも地球の上の日本であることを認識できる士がいなかった。これは幕臣だけではなかった。各藩の藩士も同様だった。260年間も鎖国によって外国の事情が分からなかった。長州の吉田松陰でさえ外国事情を知りたくてペリー艦隊に乗り込んで密航しようとしたではないか。拙劣である。



江戸城無血開場に反対した理由。

田邊太一はつぶやく。

<なぜ徹底抗戦を主張したか？>

幕府時代には、職を解かれることを覚悟して、(国を思って)上司に開国を直言した。実際そうやって職をとかれた。こんなに積極的に動いた私が明治になってから「吾不閑焉の態度をとったことをいぶかしく思う人があるだろう。自分でもよく分からないところがある。榎本、大鳥、荒井が誠心誠意薩長政府に協力したのに対して対照的だった。しかしそれしか出来なかった。

田邊太一は更につぶやく。

<無血開城してよかった>

私は心ならずも小栗忠順の路線に沿って、榎本、大鳥、荒井とともに“徹底抗戦”を主張した。徹底抗戦すれば、日本を二分した内戦になる。フランスが支援する東日本対イギリスが支援する西日本だ。戦いが終了した時点で日本民衆は疲弊し、東はフランス植民地、そして西はイギリス植民地、北海道はロシア領、そして後年朝鮮半島もロシア領となった筈だ。



個人的満足

田邊太一はつぶやく。

<昌平坂学問所で教えてもらった倫理観>

私は“責に任じて”自分のことよりも、国家のことを考えて行動した。これは私の倫理観だった。この倫理観は、昌平坂学問所において儒学者の父、田邊石庵から教えてもらったものだ。責任を果たすとは倫理観に立って自分の仕事をする事だ。幕府時代の上層部に上層部としての責任を果たす気概のある人物が少なかったことは残念だ。だから薩長にやられたのだ。

田邊太一はつぶやく。

<長州に対する個人的エール>

薩摩は嫌いだが、長州は嫌いではない。長州軍の鳥取藩第8番隊長だった北垣国道(後の内務次官、枢密顧問官)が実の娘を甥田邊朔郎にもらってくれといた際に反対しなかった。長州藩騎兵隊の隊員、片山東熊(後の国宝迎賓館設計者)が朔郎の姉をもらってくれと言った際も反対しなかった。長州の人は単純でわかりやすい。決して策略を弄するようなことはなかったから。

田邊太一は更につぶやく。

<長州へのエール、つづく>

甥の朔郎は、長州伊藤博文の作った枠組みの中で生きさせてもらった。岩倉遣米欧の副使の一人、伊藤の働きによって産業革命の重工業発祥の地、スコットランドから数多くの教師を招聘して工部大学校(東大工学部前身)を設立し、学長に幕府時代の私の仲間、大鳥圭介を嵌めてくれた。大鳥は琵琶湖疏水推進者で長州閥の北垣国道に朔郎を推薦してくれた。長州はよい。

田邊太一は更につぶやく。

<学者田邊家の中継ぎを果たしたことへの満足>

薩長の世になってもかわらず、没落した幕府旗本田邊家を再興させたことが満足だ。父親代わりになって育てた田邊朔郎が土木で大成功した。朔郎の姉を嫁にだした片山東熊も建築で、私の娘三宅花圃も小説で、その夫、三宅雪嶺も評論で大成功した。老後は、娘花圃のところでは好きな漢文の積読をして静かに暮らそう。外務省退官後の吉原通いを忘れて。